

Mランド ニュース

さざんかや 小さくほっかとの申す



編集・発行
Mランド 益田校
発行責任者 谷口 ひとみ
〒699-5131
島根県益田市安富町 3330-1
TEL 0856-31 5050
FAX 0856-25 1540
HP <http://www.mland-masuda.jp/>
Email info@mland-masuda.jp



皆さまからのご意見ご感想を
お待ちしております

【 Mランド歳時記 】

12月...【創立記念日】

Mランドは12月5日で46周年を迎えます。この一年Mランド人として活躍した社員を社員が選び、ナンバー1賞として表彰し、世界300選を目差す47周年に向かって、また新たな決意で臨んでいきます。

スマイルフェスタ開催

営業部 課長 矢次 宏稔

十一月一日(日) “スマイルフェスタ”と題し、イベントを開催しました。春のMランドまつりとは違い、益田の企業(JA西いわみ・島根トヨタ・ハートクック・Mランド)の四社共同という初の試みとなるイベントでした。

四社共同で実施するメリットは、各社ごとに独自の募集を行なうことで多彩なイベント内容があることで来場者数の増加が図れます。そして、何より来られた方々により楽しんでいただくことが可能となることが挙げられます。

Mランドのイベントは、“小学生から一〇〇歳まで、誰でも、何でも”

をキャッチフレーズとし、体験乗車を実施しました。普通車・大型特殊など“本物”の車に乗り込んでハンドルを握り、アクセルを踏む小学生たちの笑顔は眩いほどに輝いていました。同乗したインストラクターも普段とは一味違った表情、笑顔が印象的でした。まさしく“スマイルフェスタ”の名に違わぬイベントとなりました。

運転する真剣な眼差しと笑顔がとても印象的でした。



お楽しみのスタンプラリー抽選会、「いい物当たってよかったね」



大型バスやタイヤショベルなどの試乗でにぎわいました。

Mランドでの課外授業

『広島工業大学専門学校スキルアップ研修』

教習課 安達 豊



Mランドで免許を取得しながら研修に取り組むことで学校の単位になる。これは、昨年から始まった画期的な研修プランです。今年、広島工業大学専門学校から十名の入校がありました。

研修テーマを「ポジティブ」として掲げ、明るく前向きに生きる大切さや、一緒にいると元気になれる人と呼ばれるようになるために必要なさまざまな取り組みを、研修中に行ないました。

Mランドで体験できる数々のボランティア活動に参加することで何かの気づきを得てもらおうという、昨年から引き続きのカリキュラム。また、今年から始めた新たな取り組みとして、朝晩のミーティングの中で、研修メンバー間でお互いのよいところを見つけ、褒め合う「ホメトレ」を実施しました。

そして、今回の研修の中心となったのが、「リーダー制」の導入でした。一人一役を与え、各自にリーダーとしての責任をもってもらい、その責



目を閉じ、便器に手を入れ磨く、手は目より勇気があるのかな？

任を果たすためにどうすればよいのかを、ポジティブに考え行動してもらいました。これらの取り組みに、十名の研修生は実に真剣に取り組んでいました。入校当初は、慣れない環境から戸惑いもあつたようですが、メンバー同士で助け合いながら、とてもよいクラスへと成長したようです。この研修に関わることができたMランド社員もたくさんの気づきと元気を貰いました。



「やまびこ点呼」の訓練をしている
広工大専門学校の学生さんたち

『YOGAの森に天使が舞い降りる』

オフィサー 水津 裕二

この秋、『YOGAの森』ではたくさんのお子もたちが「迷路」を歩き、「北斗の塔」に登り、「しあわせの鐘」を鳴らし、落ち葉を踏みしめながら自然を心と身体で感じ、元気な声をMランド中にこだまさせています。

モータールト部では、昨年度から小中学校の「かつこいいみんなの自転車教室」(かつこいいとは、当たり前のこと)が当たり前に行なうことができることを開催しています。今年からは、わくわく宿泊体験や高校生に対する自主自立をテーマにした社会研修の実施等、Mランドは免許取得のためだけではなく、いろんな方々が来てもらえる場となるための歩みも創り

います。昨年度の自殺者数は三万人を超え、また、全国の小中学校の不登校者数は十二万六千八百八人、中学生では実に三十五人に一人が不登校ということでした。

このように混迷した時代だからこそ、「山笑う春、山滴る夏、山粧う秋、山眠る冬」の自然を感じ、自然と共に心を育み感性を磨き、人や自然との関係性、つながりに自ら気づいてもらいたい。

そして、生きる勇気と希望を持ち、このMランドに何度も帰ってきたい、そう思える「ソウルメイト(魂の友)」の集う場となるよう、今後も取り組んでいきます。



無心山にあるブランコで気分も爽快。



「YOGAの森」を探検中



無心山の下にある「これぞ迷路」で楽しむ園児たち



「YOGAの森」の中にある「しあわせの鐘」を鳴らしている園児、何をお願いしたのかな？



会長のいざやき



小河 二郎 会長

日本IBM社での講演

— 世界一の企業から

— 日本一の富士を望む —

世界的にも有名で広く知られている企業IBMの、その日本IBM社が主催している「天城エグゼクティブ・セミナー」の講師として講演を依頼され、伊豆の山の中にある講演会場まで行って来た。

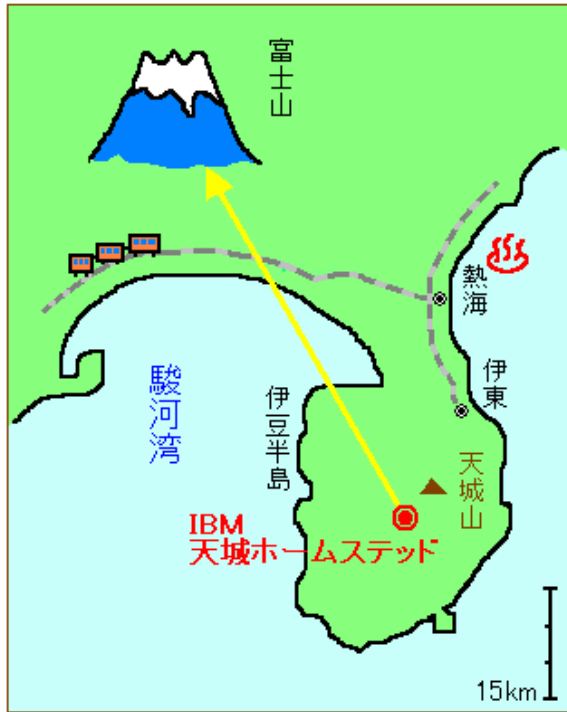
今、日本IBM社は絶好調らしく、今日の日経新聞にも見開き両面を使って上品な広告を載せている。IBMは現在、クラウドコンピューティングという提唱を盛んに行なっている。かつて松下幸之助が水道哲学を打ち出したことがあるが、IBMはクラウドとも言える情報の雲から恩恵を受けるシステムを考えている。

このたび、このIBM社の天城ホームステッドに行つて目についたことだが、変に刈り込んだ低木があった。何かと思つてよく見ると、どうも売り出し中の「クラウドシステム」の雲をイメージしているらしい。

世の中の変化の流れは凄く、その先端を走る情報技術の分野で最先端のIBM、そんなことまで考へて行つたわけではないが、会場までは、熱海で新幹線を降り、JR伊東線の

終点伊東まで行き、待つていただいたタクシーで小一時間霧雨と霧で何も見えない中を走り、ようやく到着する道程だった。この広大で何も無い伊豆の山の中のこの一点に絞つて研修施設を建てたIBM。わざわざ天城の山に大勢の人を集める意味がどこにあるのか。

私は昔からこう思つてきた。富士山が見えるか見えないかで土地の価値に天地の開きが生まれ、富士の見える土地は十数万円、百万円高いのは当たり前だと口癖のように言つていた。また、富士山は独立峰で、周囲どこからでも見え、どこも同じように考へていた。ここまでは私の発想だが、さすがIBMは違う。日本一の富士山はどこからでも見えるが、どこから眺める富士が日本一かは一歩しかない。この一点に絞ればこの地とこの地点を定め、天城ホームステッドを建てた、と思われ。



そうして、ロビーでケーキとコーヒの接待、世界一の富士をみるための接待を受ける。世界一になることとは、ここまですることなのか。

私はIBMのほんの一部、足の指にも触れたか触れないかのことではあるが、大きなショックを受けている。あまりに私自身がいい加減の人生を過こし、ちょっとばかりいい気にな

つていた田舎者にすぎないなあと長嘆息をつき、次のような感慨を得た。

一番の中にあつて、なお一番を狙う、常に最高を求め続けることこそIBMの原動力であり、即この地で行なう研修の意義であると。

このIBMの一番よりちょっとずれるかもしれないが、森鷗外有名な遺言の「吾が墓碑に石見人 森林太郎のみ記せ」という言葉が、何の脈絡もなく思い出された。私はこの言葉に、彼の反骨精神を感じ取つてゐる。即ち、鷗外の生まれ津和野は、山間の小さな小さな街で、石見地方そのものが、東は長い歴史をもつ出雲、京大阪に接し、南は太陽輝く山陽の地広島であり、西は明治政府の権力中枢の長州に囲まれている。ゴツゴツした岩のような小山に囲まれた鍋底のような、そんな石見の地で生まれ育つた鷗外は、官僚として位人臣を極め、その上文豪として天下にその名を高めた。明治時代の立身出世のお手本のような人物でありながら、この「石見人森林太郎のみ記せ」といった言葉をIBMのこの最高の環境にあつて思い出すとは……。

ここらあたりが限界か 阿々失笑

Mランドファミリー紹介

Mランド敷地内の木々も冬支度を始めた十一月十三日、私たちMランド社員は素敵な笑顔と出会いました。

それはこの日、見事に卒業検定に合格した小坂治子さんです。小坂さんは東京在住ですが、ご主人もMラ



卒業証明書を手に満面の笑顔の小坂さん(左)

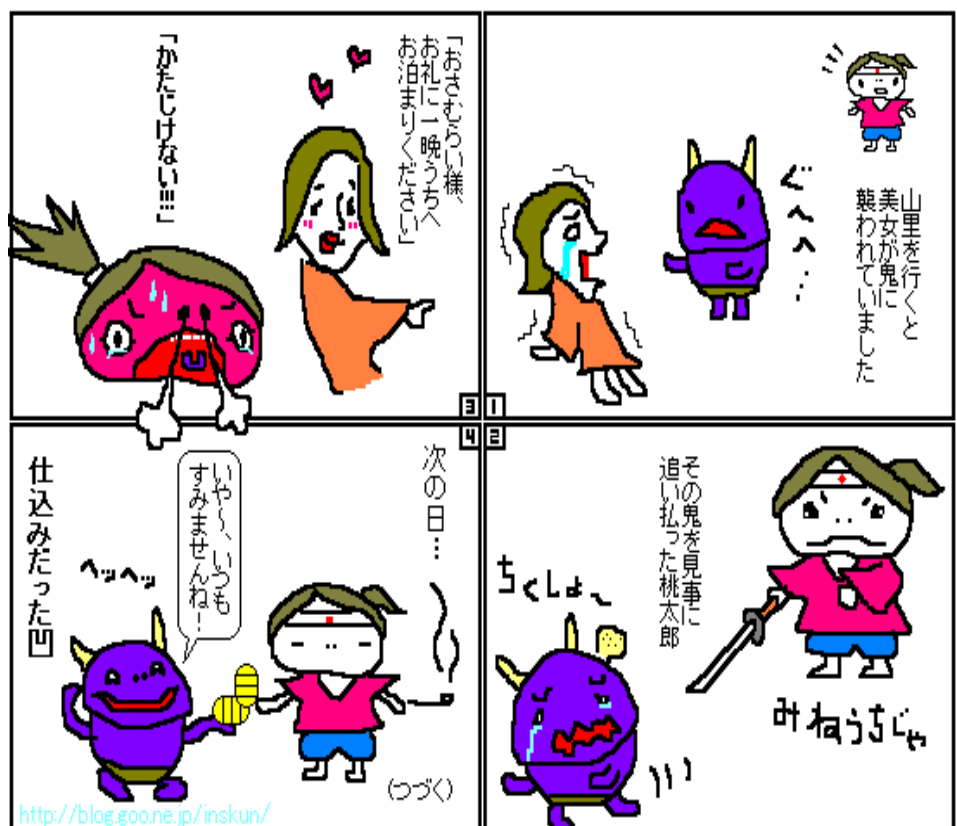
ンド卒業生というご縁があり、今回の入校となりました。

小坂さんのご主人はMランド卒業後もMランドファンとして、Mランドのさまざまな取り組みに、現在もご尽力いただいております。そして、小坂治子さんもMランド入校後、ボランティア活動をはじめイベントのお手伝いなどで大活躍でした。そんな小坂さんから、温かいメッセージをMランドに寄せていただきましたのでご紹介します。

Mランドの運転の第二の人生を歩きました。Mランドの根拠地を教わることがあり

うな、この仲間がいたからこそがなされたのだらうなと思ひました。そして、丁寧に指導をしてくださった

Ver.36 《ももたろう第12話》 桃太郎



新人インストラクター紹介



教習部 又賀 大介 さん

先輩方、また、家族にも感謝しています。この気持ちをいつまでも忘れず仕事に取り組んでいきたいと思ひます。

インストラクターになって、まだ半年も経っていないのですが、振り返つてみても、自分が指導員になれたことに驚いています。

「念ずれば花ひらく」、無心山にあるこの石碑の前で、毎日仲間全員が審査に合格するよう念じました。実際に受かったときは、自分一人では乗り越えることができなかったら

心掛けています。私自身も気づく力を養うために毎朝、重美塾に参加し、トイレ掃除から学んでいます。そして、ゲストの皆さんからも日々勉強させてもらっています。一日も早くゲストの全員から「ありがとう」と言ってもらえ

るようにな精進してまいります。

今後ともご指導のほどよろしくお
願いたします。